熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	前號短評 ： 批評
Author(s)	龍田の山人
Citation	龍南會雜誌，４１： ７４-７５
Issue date	1895-12-17
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4743
Right	

Kumamoto University

空想家と誹られ、妄想家と罵られ、尙ほ諤々相戰はんとするハ、蓋足下等の眷顧を恭ふすること、深きに慣れたればなり。言或ハ冗漫に流れ、無禮に馳せ、往々足下等の尊嚴を傷りたるもの、蓋多からむ。予生來鈍愚、禮に慣はず。時に或は氣驕り、情激するときは、狂態を呈し囈語を漏す、こと往々なり。幸に恕せよ。恐惶謹言。

乙未冬十一月十九日脫稿。

追白。世界文學と國民文學の意義に付きて、尙ほ予が言を疑ハゞ、乞ふ、ポスチットの比較文學を御一讀あれ。予前論を出し、計らず氏の該著に接して、予が言の符合せるを喜びき。予は是に於て益々予が議論の妄ならざるを信ず。足下等願くば、予を以て妄りに、空想を吐き散らすものとする勿れ。足下等固より信ずる所是あらむ。知らず、世の中に世界文學なし、など云ふに至りては。咄々何等の妄論狂語ぞや。批評の業や至難なり。生「カジリ」にて人の議論を評するは、識者の大に誡む所、足下等乞ふ這般の用意ありて然るべし。朝飯前の仕事として、批評されては困り入るなり。請ふ、大に責任を負ふ所あれ。匆々不備。

前號短評

龍田の山人

我が會の雜誌、月を重ね、號を追ふて、益々整備するを見るは、實に欣喜に堪へざる所。野生は、此頃徒然なるまゝに、前號を再讀し、心に思ひ付きたる節なきにあらざれば、こゝに筆を執りて、短評を試みぬ。短く評するは、筆かなはざればなり。筆かなはざる野生が、強て批評を記すは、我會の雜誌を思ふこと深かければなり。讀む人々の心してよ。

論說欄に有益なる材料多きは、殊にめでたし。內田教授の論文、精にして密、花ありて實備はるもの。讀むこと深切なれば、益を得るこ

と尠からず。湯原教授の『豈好辯』、何等の快論文。而も所論蒙を啓く甚だ多し。窃かに考証該博、議論確實なるに服す。以て反駁論文の上乘なるものと謂ふべし。愚昧野生の如きものにして、兩教授の論文を批す、其罪深からざるに非ざるも、之を讀みて益するところ多かりければ、茲に一言してうの高意に報ゆるのみ。豈他意あらんや。藤村氏の『漢人種』、世界の大怪物に對する疑問を擧ぐ。滔々數千言、辯し去り辯し來りて、氣焰万丈。能く福井前教授得意の論法と着眼とを學べるもの。議論に新奇なる所なきも、ひと面白く通讀し了んぬ。雜錄欄に至りて大幸教授の論文あり。野生通讀せざれば言はず。杉山教授の『円錐曲線の問題を直角射影法にて解き』は一讀あぬ。言ふべきことなし。『島津泰清公の遺事』、中々面白し。文章も亦た範とするに足る。『右を島津泰清公の遺事にして云々』の段より考ふれば完結せるものゝ如し。未完とあるは如何にや。大野氏の『死を怖れざる精神』、論旨得て壯快。國事多端の折柄、我が國民たるものは、何人も『死を怖れざる精神』を有したるものならずや。『勇資の尙ぶべきは何の故ぞ。素養の重ずべきは何故ぞ』。呼嗚、勇資素養、之を以て何人にか望むべき。籠志弱行の徒、彼れなんするものぞ。九州の地、由來朴訥仁に近きの里。今や漸く彼輩の跡梁甚しきものあらんとす。豈に慷慨以て慨すべきに非ざるや。文苑欄いと賑かなるは、めでたし。野生元來不風流なれど、之を讀むで常にあくことなし。されは文章詩歌を批判すること、かなはざれども、野生が文苑に對する希望を、憚なく吐露せしむれば、今少し文苑に新手の人々の花を咲かせられんことにぞある。若し極端に評するを得せしめば、文苑は毎號殆ど二三人士の專有する所なり、と謂ふを得るにあらずや。批評欄の此號の殊に面白きは、誰も喜びし所なるべし。孤松生相變らず健在、野生は孤松生が屢々批評欄に筆を執らるゝことを謝す。江楠生の大和歌の評、門外漢にも面白く讀まれぬ。野生は毎號此の如き評論あらんことを希ふ。睨天窟主人の批評、辯ぜる所、流暢にして壯快。野生勿論『文學上に於ける現時の國家主義』の記者と批評者との意見、孰れか是孰れか非なるを言はず。言ふは尙ほ早ければなり。楮村學人既に二人の好敵手を得たり。學人果して奮戰する勇氣あるや否や。但しこゝに注意すべきは、孤松生と睨天窟主人と、其反駁の意見の畧ぼ相似たることなり。時に或は全一の記者の手になりしやを疑はざる可らざる程の處もあり。亦た奇遇ならずや。雜報欄、やゝ整頓するに至れるは、喜ぶべきなり。我既に知れる事實なれど、之を雜報欄に讀む時ば、言ふべからざる愉快あり。雜誌部委員の手腕を振ふべき餘地は、實にこゝにあり。野生は此欄の整頓せるを喜び、尙ほ一層委員諸子の之に盡力せられんことを望む。妄評多罪。